

まちづくりに取り組む女性との“本気”で語ろう会 会議録

団体名	まちづくりに取り組む女性
日 時	令和5年6月28日（水）18時30分から20時30分まで
場 所	KITADA SARUGGA（北田町）
参加者	まちづくりに取り組む女性5名
	市長、政策推進課長、商工振興課長、政策推進課職員

意見交換

- 1 鹿屋市のいいところ
- 2 若い世代の流出について
- 3 鹿屋市を盛り上げるために必要なこと

【参加者の意見等】

1 鹿屋市のいいところ

- 繋がりたい人と繋がることができ、そこから楽しさも繋がっていくと感じる。友達の友達が憧れの人や知り合いたい人だということがある。
- 鹿屋市民・出身者と鹿屋市の良いところについて話したところ、「荒らされていない素朴さを失って欲しくない」「癒される」「リラックスできるから自然を失わないでほしい」という前向きな意見が多かった。
- 人が財産であり、築き上げた今までの文化は、2～3年で作れるものではない。
- 「鹿屋は何もない」と言いがちだが、何もないということは余白や可能性があるということ。余白があることで、何かやろうと思ったらすぐできる可能性があるのではないかと感じる。
- 文化財でいえば、貴重なものが、身近にたくさんある。みんながその魅力を知ったときに、もっといい街になる可能性が非常に高いと思う。
- 食フェス等で、スタッフがイベントに真面目に向き合っていることが伝わってくる。客という立場での参加も十分楽しかったが、イベント運営に携わることもすごく楽しい。真剣に取り組む大人はカッコいいと思うし、こういう姿を見て、後世に続いてほしいと思う。若い人たちに、このような大人の姿を知ってほしい。
- 人柄や温かさなど、お金に替えられない魅力がある町は少ないと思う。
- 食べ物のクオリティが高い。おいしいものが周りにたくさんある。

2 若い世代の流出について

- 「高校卒業の時点で分かれ道が来る」と言われる。就職する人は、鹿屋に残ることもあるが、進学する人は、市外・県外に出る。
- コロナ禍で国内外問わずオンラインで学べるようになった。鹿屋にいても大学を卒業できる可能性はあるのに、そこまで広がっていない。
- 地方の大学と都市圏の大学が提携して、同じキャンパスを使いながら、それぞれの学生が大学を卒業できるというシステムもある。大人たちが考えれば、学ぶ機会が広がる可能性は探せると思う。
- 鹿屋市民は、「洋服を買うところがない」など無いことに答えを出しがちだ。鹿屋市がもっと魅力的になる可能性や、「都市を追いかけずに都市からうらや

- ましがられる街になれる」と10代の子と話しても、実感がないようだった。
- 高校卒業後の学びの場や憧れを求めて飛び立ってしまうのは仕方がない。外に出たいという憧れの気持ちも大切にしたい。外で学んだものを持って帰ってもらうことが大事だと思う。
 - 学校等で、地元で頑張っている人の話を聞く機会はあると思うが、聞くだけでなく体験することで「あの時の経験は～に繋がるな」「あの人だったらこれができるかな」のような期待を持てるかもしれない。
 - 中高校生は、多感な時期であり様々なことに興味を持ちやすい。地元で面白いことをしている人と何かできる可能性を実感できる仕組みがあったらいい。

3 鹿屋市を盛り上げるために必要なこと

- 女性にとって魅力的なまちは働き盛りの世代に選ばれることに繋がると思う。
- 都市圏では、オフィスビルの中で企業同士をつなげる取組もある。コワーキングスペースもそのような場になれば、活用方法が広がる。鹿屋市は個々で頑張っている感じがする。
- 従業員の5歳から16歳までの子どもを対象に、従業員の子どもまたは世界の従業員とサマーキャンプを行っている。世界の人と関わることで、違う価値感の世界を知ることができ、視野を広げることにつながる。
- 世の中にあることが分からないと、自分の良さに気付かないし、可能性も広がらない。そのためにも視野を広げることは大事。
- サマーキャンプでは、英語で話すように促す。最初は上手く話せないが、できないことを認識することで、自然と学習のモチベーションになる。次のキャンプまでにもっと話せるようになりたいという子が増えてくる。社員自身も、子どものために英語を話せるようになろうと勉強する。
- このような取組みが社会貢献になるし、企業のブランディングにもなる。子どもたちにどのような影響があるか分からないが、会社の製品に対する愛着心になるかもしれないし、将来この会社で働くことになるかもしれない。
- 日本の教育は、苦手なことを頑張ることに偏っている気がする。バランスよく、良いところを伸ばすと、苦手なことも頑張れるようになる。苦手なことばかりに注力し、駄目だ駄目だという教育を受け続けると、「自分はすごい」とは言いにくい。
- 学生時代に苦手教科を苦勞して勉強したが、大人になって何の役にも立たなかった。時間や想像力を、好きなことに使ったらもっと時間が有効だったと思う。
- インド人は、英語力などの苦手分野より数学の強さとかITの強さを伸ばす方向にチェンジし、今世界を牛耳っている印象。日本人は誠実な国民だからこそ、プラス面の自信をつけることを、子供の世代から行ってほしいと思う。
- 自己肯定感が低い子どもが多い。子ども達と話しても「僕なんか」「自分なんか」と話す子が多い気がする。
- 「鹿屋ってどんなところ？」と聞かれたときに、「何もないよ」と謙遜して答えがちだが、「いいところだよ」と言える気持ちを小さい頃から育ててほしい。
- 自分のことをほめていいんだ、地元を自慢していいんだという習慣を付けられたら、子ども達も自分や地元のことを前向きに話せる。毎週大隅半島各地で楽

しいイベントをやっても盛り上がっているのです、その良さをもっと発信できたらいいと感じている。

- 子どもは親の影響を受けやすい。親が、「鹿屋で生涯暮らしても安心、安全だ」と示すことが、子ども達が鹿屋に帰ってくる一番近道だと思う。
- 鹿屋に帰ってくる基準は、世代によって違う。世代別のアピール方法を考えた方がいい。対象の人たちが考えていることにいかにコミットさせるかが必要。
- 自分の親もあまり鹿屋市の歴史に興味がない。人が興味を持つ分野はそれぞれだが、何をきっかけに興味を持つか分からない。興味を持ってもらうきっかけはいくつあってもいい。
- 専門家からみたら、大隅半島の地層はすごい。城山の上にも城の跡地があるが、傾斜等の関係で整備が難しい。
- 大園橋のようなきれいな状態で残っている石橋は大隅半島では珍しい。残すためにはお金もかかるので、人に来てもらって、観光につなげる取組ができればいい。子ども達にも来てもらって、学びの教材にしたい。
- 高校生がやりたいこと(動画を作りたい、インスタ映えさせたいとか)と大人の取組がマッチしたときにもっと面白い取組になると感じている。
- 子ども達が「どういう街にしたいか」「どういうことをしたら楽しいか」を拾って、マッチングさせれば、よりよい街づくりに繋がっていくのではないか。
- 子どもの小学校卒業時に、外国へハンドセルの寄贈をしたが、送料が高かった。SDG s の取組は、企業も関心が高いので、このような取組への資金援助を募集すれば、一定金額集まると思う。企業価値も高まる。
- ネーミングライツで、まちの品格を上げるイベントを行っても面白そう。
- カンパチダンスの拡がり方がすごい。各小学校の運動会で、必ずどこかの学年で踊っている。最初は何これと思ったが、10年経って子ども達が踊れている。

【市長】

- 会議をすると「足りないところは何か」「困ってることは何か」という話になりがちだが、いいところを伸ばすことも大切なのではないか。
- 住んでいる市民目線で「鹿屋はいいところだ」「鹿屋も捨てたもんじゃない」といった発信があってもいい。
- コワーキングスペースの役割として最も大切なことは、繋げていくこと。鹿屋市には、いろんな人がおり、それをつなげて大きな塊にしていく。新しい価値を創造していくようにつなげる役割の人が必要。
- シビックプライドは、人口が多い少ないという数字でまちの元気度を測るのではなく、躍動感や活力、地域の元気を見る。日本の人口が減っていく中で、活力は上がっていく。そのためには、市民の皆さんの交流や地域の皆さんに愛着を持ってもらうことで活力が上がっていくことに繋がっていくと考えている。
- 家庭教育はとても大事。小さい頃のことは、一生忘れない。
- 高校生が取り組んでいることを市民活動のきっかけにしてもいい。まちの価値を上げることは、シビックプライドに繋がる。国際貢献、地域貢献でまちの品格を上げる。